国語科（現代文Ｂ）学習指導案　　指導者　福田　亜里沙

一　日　時　　平成三十年十月三十日（火曜日）　第五時間目（50分）

二　学　級　　第三学年四組　四十一名（男子十九名　女子二十二名）（物理地学教室）

三　単元名　　マインドマップで発想を広げて「当たり前」に疑問をもつ視点を養おう

四　単元の目標

（1）文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりしようとする。（関心・意欲・態度）

（2）文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりする。（（1）のウ）

（3）語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色をとらえ、自分の表現や推敲に役立てる。（知識・理解）（（1）のオ）

五　取り上げる言語活動と教材

（1）言語活動

論理的な文章を読んで、書き手の考えやその展開の仕方などについて意見を書くこと。（（2）のイ）

（2）教材　鷲田清一「顔の所有」（『現代文Ｂ』　数研出版）

六　単元の具体的な評価規準

（1）文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを効果的に深めたり発展させたりしようとしている。（関心・意欲・態度）

（2）文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを効果的に深めたり発展させたりしている。（（1）のウ）

（3）書くための発想を広げたり情報を整理したりして、自分の考えを文章にまとめている。

（4）表現や効果について吟味して自己評価や相互評価をし、それらを自分の作品の推敲に役立てている。

（5）小論文を書くために必要な考察の型や論理的な文章展開の型を理解している。（知識・理解）

七　指導観

（1）単元観

本教材である「顔の所有」とその次に収録された「仮面」はどちらも、多岐にわたる現代社会の問題の本質的な部分に、哲学の側面から切り込んだ評論文である。「素顔」とは、「仮面」とは、と普段なにげなく過ごす「じぶん」という存在を根底から揺さぶり、鋭く訴えかけてくる文章がつづく。生徒にとってはやや難解な文章であるが、そのような文章に触れさせるということに、思考する意義や大切さが見えてくるように思う。

（2）学習者観

指導者が初めて三年間続けて教科指導をした学年である。思えば、初任者研修の時から試行錯誤しながらもアクティブ・ラーニング視点で授業改善に取り組んできた生徒たちである。その点では、生徒の様子は、話し合い活動に慣れている。しかし、各々が抽象的な物事を自分事として受け止め、関連づけることはまだまだ未熟であるように思う。今回、難読な本教材の奥深さに触れさせた上で、筆者の現象学的エッセンスを汲み取り、当たり前だと認識されている事柄に疑問をもたせたい。そして協働学習を取り入れながら自分事として思索する態度を養いたい。それまでの学習経験や身につけた能力などを生かしながら、課題を自ら設定し探求する学習態度を養い、本授業を契機に学問の世界の入り口に立つ経験をさせていく。

（3）教材観

教科書範囲も最後の章に入り、難読な文章に挑戦する。「みえてはいるが誰もみていないものをみえるようにするのが、詩だ」（『アウシュヴィッツへの旅』一九七三　中公新書）という詩人長田弘の言葉をしばしば引き合いに出す鷲田。この言葉は哲学にも言えることであろう。私たちの「当たり前」に疑問符をつける現象学という新しい哲学的態度を通して学問が伝統的に使用してきた言葉の限界をあばく。「顔」の意味について思考を展開し、ある意味では格闘したこの文章をなんとか読解していくことで、最後にぱっと明るく視界が開けていくことに期待する。生徒とともに苦戦しながらも読解作業を進めていきたい教材だ。

八　単元の指導計画（配当時間５時間）

次 時間	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点	◇評価規準、◆評価方法、＊努力を要する状況と評価した生徒への支援の手だて
第１次 ２時間	・教科書P240を参照し、小論文の書き方を確認する。 ・当たり前を疑うテーマ（例：自由とは…、ふつうとは…など）を各自設定し、マインドマップと表について書く。**（主体的学び）** ・インタビュー形式を取り入れ、一般的定義について反例や他の考え方がないかグループ内で尋ねあう。 ・グループで一つ一般的定義と反例について選出し、発表する。**（協働的学び）** ・小論文の問題提起（序論）を書く（１００字程度）。	・前教材で触れたマインドマップを活用させる。 ・原稿はペンネームで書き、裏面に出席番号を書かせる。 ・序論については、論理的な文章展開における一つの型を示し、それに従って書かせる。	＊問題提起を練るために、例を教員が全体に紹介する。（ワークシート①より） ＊ペアやグループで出た意見はワークシートにメモさせる。
第２次 １時間	・５人のグループを作り、グループ内で問題提起を発表する。 ・グループで一般的定義と反例や他の考え方についてブレがないか検討する。 ・問題提起について、ルーブリックを用いて評価をする。 ・回し読みをし、コメントを相手の原稿に残す。 ・各自、問題提起の推敲を行う。（提出）	・ルーブリックは三段階評価。観点はマインドマップの広がり、哲学性、構成について評価させる。 ・反例や疑問があればコメントに残させる。 ・コメントを参考に練り直させる。その際もともとの原稿は消さずに残し、推敲結果を色ペンで上書きさせる。	＊グループの助言をもらいながらワークシートを完成させる。 ◇（２）～（５） ◆記述の点検（ワークシート②）
第３次 ２時間 （本時は１時間目）	①当たり前を疑う哲学的態度、②論理展開を問う課題について問題提起を書く。 ★課題「成功とはどういうことか」**（深い学び）** **（パフォーマンス評価）** ・５人のグループを作り、グループでマインドマップを共有する。 ・グループで一般的定義を検討する。 ・自分のグループや他グループの一般的定義に反する例や他の考え方について検討をする。 ・グループで一つ一般的定義を選出し発表する。 ・他グループと反例を交流し、論証を確認する。**（協働的学び）** ・小論文の問題提起（序論）を書く（１００字程度）。 ・問題提起について、ルーブリックを用いて評価をする。 ・各自、問題提起の推敲を行う。（提出） ・第１次の各自考えたテーマか第３次の課題について、結論まで記述し、活動のふりかえりをする。	・マインドマップの使い方、当たり前を疑う哲学的態度、小論文の書き方の基礎を学んできたことを確認させる。 ・マインドマップを活用させる。 ・第１次、第２次で生徒の選んだテーマ以外から出題する。 （反例の交流について） ・自分のグループで、すでに出ていた反例については、論証の確かめ、出ていなかった反例については多角的な視点の獲得につながることを理解させる。 ・ルーブリックは三段階評価。観点はマインドマップの広がり、哲学性、構成について評価させる。 ・グループワークを参考に練り直させる。その際もともとの原稿は消さずに残し、推敲結果を色ペンで上書きさせる。	＊グループの助言をもらいながらワークシートを完成させる。 ◇（２）～（５） ◆記述の点検（ワークシート②） ◇（１）（ワークシート③）

九　本時の目標

文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりする。（（1）のウ）（パフォーマンス評価）

十　本時（全5時間中の4時間目）の指導

十一　本時の評価規準

文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを効果的に深めたり発展させたりしようとしている。（パフォーマンス評価）

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入（5分）	・5人グループをつくる。（×8） ・前時の復習をする。	①マインドマップの使い方、当たり前を疑う哲学的態度、小論文の書き方の基礎を学んできたことを確認する。	①・教員から前時に取り組んだ課題について口頭でフィードバックをし、生徒に復習させる。
展開（42分）	・★課題**「一般的な成功とはどういうことか」**について個人で考えをまとめる。 **（パフォーマンス課題）** **（主体的な学び）** ・課題についてグループで考えを共有する。 **（協働的な学び）** ・他グループの定義について反例を検討し哲学的思考を深める。 **（協働的な学び）**	②ワークシート②にそって記入する。 ③個人でマインドマップを書く。（ワークシートの1）（5分） ④個人でマインドマップから一般的な定義と反例を整理する。（ワークシートの2）（5分） ⑤グループで自分の書いたマインドマップを見せ合う。（3分） ⑥グループで一般的な定義をまとめる。（7分） ⑦一般的な定義一つを選出し、用紙にまとめ黒板に掲示する。（2分） ⑧他グループの一般的な定義を選び、反例とその理由を検討する。（8分） ⑨他グループの一般的な定義に対する反例を用紙にまとめ、黒板に掲示する。（2分） ⑩反例とした理由を各グループ1分程度で発表する。（8分） ⑪自分の考えや自分のグループ、他グループの発表を参考に書き始める。（ワークシートの3）（残り時間）	③・連想する限りマインドマップを記入させいく。 ④・過半数を納得させられる定義を「一般的」とする（前時より）ことも改めて確認させる。 ⑤・個人でマインドマップを書いた際、自分になかった考えについては、相手に伝えるようにさせる。 ⑦⑧・具体的な事例も踏まえて議論させる。 ⑩・班でどのような議論がされたか報告させる。 ⑪・次時までに書くよう指示する。
終結（3分）	・本時の学習内容を振り返る。 ・次時の内容を知る。 ・課題について一般的定義と反例を踏まえて問題提起を書く。		◇（2）（3）（4）（5） ・次時で推敲したものを教員がルーブリックを用いて評価する。

十二　第3次で使用するルーブリック

	5	3	1
A　当たり前を疑う哲学的態度	一般的理解と反例が正しい。	一般的理解と反例のどちらかは正しい。	一般的理解も反例も正しくない。
B　マインドマップ（広がり）	使用した項目が3つある。	使用した項目が2つある。	使用した項目が1つあるいは0。
C　構成の仕方	マインドマップで書いた語句を正しく用い、かつ問題提起の型に沿っている。	問題提起の型に沿っているが、マインドマップの語句について内容に関連していない部分がある。	問題提起の型に沿えていない。

十三　御高評

※第一次で使用したワークシート（すべて家庭学習）※

ワークシート①　　3年　4組　　**ペンネーム**

1．連想したことをマインドマップにしてみよう。（例：常識・正義・平等・役に立たないこと・芸術・手・建築・お金…）

2．一般的な定義（哲学的概念）とそれに対応する反例をまとめてみよう。

一般的な定義	反例（その定義に当てはまらない例）
例）所有とは意のままにしうること。	所有は所有者が囚われている点において自分の意のままにならない。　→所有とは？
例）平等とは誰に対しても等しく接すること。	
例）平和とは事件が起こらず安寧が保たれること。	
今回はくな例）日本語は非論理的なものだ。（これは哲学的というよりも言語学的）	→本当に非論理的？
今回はくな例）若者の活字離れが叫ばれて久しい。（これは哲学的というよりも社会学的）	→本当に活字離れが進んでいる？

【小論文】の構成

①問題提起
- 普通は～＝一般的には～（一般的な定義）
- しかし～
- なぜなら～（一般的な定義の理解を疑う観点）

②意見
- 私は～（自分の考え）
- なぜなら～（根拠）
- 例えば～（補強）
- 確かに～（反論の想定）
- しかし～（再反論）

3．問題提起を書いてみよう。

ペンネーム	A	B	C	コメント
よの				
よの				
よの				
よの				

	5	3	1
A　マインドマップ	使用した項目が3つある。	使用した項目が2つある。	使用した項目が1つあるいは0。
B　哲学的観点	問題提起が「当たり前」を疑っていて納得できる。説得力がある。	問題提起が「当たり前」を疑おうとしている。	問題提起が「当たり前」を疑えていない。
C　論理性	一般的定義と反例が正しい。	一般的定義と反例のどちらかは正しい。	一般的定義も反例も正しくない。

コメント欄（回覧にて）

※※本時のワークシート※※

ワークシート②　　3年　　4組　　（　　）番（　　）

○みんなへ：今日は、アクティブ・ラーニングの公開授業です。いつもと違う場所で、大勢の先生方に見られて緊張するかもしれませんが、君らが試行錯誤しながら取り組んだことは全部正解です。いつも通りでだいじょうぶ。

○今回の目標：あえて**当たり前を疑ってみよう**（この考え方を**クリティカル・シンキング**といいます）。

○今回のテーマ：**一般的な「成功」とはどういうことか（人間やその他のあらゆる生き物や会社）**　です。

1．「成功」について連想したことをマインドマップにしてみよう。

成功とは

2．一般的な定義とそれに反する例（定義に当てはまらない例）や他の考え方をまとめてみよう。

一般的には成功とは〇〇である。（と言われている）	反例・他の考え方
成功とは	
成功とは	
成功とは	
成功とは	
成功とは	

【小論文】の構成

①問題提起
- 普通は～／一般的には～（一般的な定義）
- しかし～
- なぜなら～（一般的な定義の理解を疑う観点）

②意見
- 私は～（自分の考え）
- なぜなら～（根拠）
- 例えば～（補強）
- 確かに～（反論の想定）
- しかし～（再反論）

3．「2．」を踏まえて、問題提起を書いてみよう。

名前	A	B	C	コメント
より				
より				
より				
より				

	5	3	1
A　当たり前を疑う哲学的観点（2→3）	一般的理解と反例が正しい。	一般的理解と反例のどちらかは正しい。	一般的理解も反例も正しくない。
B　マインドマップ（広がり）（1→3）	使用した項目が3つある。	使用した項目が2つある。	使用した項目が1つあるいは0。
C　構成の仕方（3のみ）	マインドマップで書いた語句を正しく用い、かつ問題提起の型に沿っている。	問題提起の型に沿っているが、マインドマップの語句について内容に関連していない部分がある。	問題提起の型に沿えていない。

ワークシート③　　3年　4組（　　）番（　　）

◆自己評価　（Aできた・Bまあまあ・C改善の余地がある）

評価項目	評価
学習目標（「当たり前」を疑う視点を養う）を確認して授業を受けたか。	A・B・C
意欲的に学習活動に参加したか。	A・B・C
今回の授業では、マインドマップを効果的に使えたか。	A・B・C
今後思いついた内容を整理するためにマインドマップを使えそうか。	A・B・C
「当たり前を疑う」視点にそって小論文を書くことができたか。	A・B・C
他者との交流を通して、考えを深めることができたか。	A・B・C

◆「当たり前を疑う」視点についての振り返り

◆小論文の相互添削活動についての振り返り

◆小論文を書くにあたり、気をつけたいと思ったこと

◆今回の活動全体を通じての感想

本文

顔の所有

鷲田清一

顔は誰のものか？

しかし、そもそもこのような問いは間違っているのかもしれない。誰の顔かと問う前に、そもそも顔は誰かによって所有されるものなのかどうか、それが問われねばならない。「誰かの顔」と言うとき、顔はもう、顔以外のものと、それから分離したかたちで関係づけられようとしている。いやそもそも誰かの顔の前で、「これは誰の顔か？」と問うような状況がありうるだろうか。死体の検証現場なら話は別だが。

我々は誰かの顔の前で（というより、誰かの前でと言うべきだろう）、「あなたは誰か？」と問うのであって、顔は「誰のもの」としてよりむしろ、「誰」として問われねばならないはずだ。「誰かのもの」として問うことによって、つまり「所有」という比喩によって顔をとらえようとすることによって、顔が消失するということがあるのではないだろうか。

が、そうすると、そもそも誰かの「素顔」という概念も不可能になるということになるのか。おそらくそうである。素顔が「ありのままの」顔、「ほんとうの」顔を意味させられている限りは、〈顔〉という現象が、真の顔と偽りの顔とに、つまりは「素顔」と「仮面」とに分割されるとき、その分割の規準となっているのは、顔と（おそらくはその顔面の背後に想定されている）「誰」との一致ということであろう。ルソーが覆いとしての顔面の背後に想定したあの「わたしの内部」という観念、「一連の感情のつながり」という観念が、その規準の典型的な例であった。

しかし、このような「わたしの内部」、つまりわたしの「誰」が、顔によって可能となる、顔によって存在し始める、としたらどうだろうか。そのとき「素顔」はいったい何に一致していることになるのか。

顔がもし所有の対象であれば、人はそれを思うがまま自由に操れるはずだ。実際、所有権をめぐり西欧の思想史の中でも、「所有」という観念は、常に「自分の意のままにしうること〔随意性、自由裁量権、つまり自由に処理してよいこと〕」という観念と等値のものとされてきた。が、しかし、マルセルが身体に関して言っていたのと同じように、顔は誰かが思うがまま自由に管理・統制しうるものではない。顔において、わたしはその主人ではない。いやむしろ、顔はわたしの意のままにならないものの典型ですらあるのではないか。

顔を自分のもの、自分の意のままになるものと考える、つまり所有と操作の対象と考えるとき、我々は顔に所有される……。そういう逆説が顔の所有にはつきまとう。

> 私たちは私たち自身にとって処置可能ではない〔＝私たちは自分の意のままにならない〕。私たちの存在には外部の事情、おそらく不完全にしか考えられない事情によって、突然私たちを近づける部分がある。ちょっとの間、鍵が私たちにわたされる。何分か経つと戸はまた閉ざされて、鍵は消えている。そういうものだということを、私は謙虚な悲しみをもって受けいれなければならない。（G・マルセル『存在と所有』）

右で述べたように、西欧の思想史において、「所有」という観念は常に「意のままにしうること」（＝随意性・自由裁量権）という観念に置き換えられてきた。ということは、わたしにとって自分の存在が意のままにならないということは、わたしが「わたしのもの」ではないということ、つまりわたしはわたし自身を所有しえないということである。

顔についてはどうか。顔はたしかに、作ること、取り繕うことのできるものである。が、作り、取り繕ったつもりになっているだけで、本当はその作った顔、取り繕った顔を自分で見ることはできない。それは一生できない。その意味で顔は、わたしから遠く遠く隔てられている。そして顔はそれを作りうる、取り繕いうると考えたとき、つまり自分の意のままになるもの、自分の所有と操作の対象であると考えたとき、〈顔〉という現象はわたしから最も遠ざかる。皮肉にも、「わたしのもの」としてのこの〈顔〉が他者に対して閉ざされてしまうからである。〈顔〉は、わたしだけのものとなることによって、わたしから遠ざかってしまうのだ。

そのことを今、所有することはそのまま所有されることであるというパラドクシカルな現象の方から考えてみる。ヘーゲルは『法の哲学』で、所有におけるこの所有関係の反転という現象について、次のように書いている。「所有において私の意志が一つの外面的な物件のなかへおのれを置き入れるということのうちには、私の意志はその物

件のうちに反映されるとちょうど同じほど、その物件において捉えられ、必然性のもとに置かれるということがふくまれている」。所有はその主体が何かある対象を自己の存在にとって不可欠のものとして要請している限りで、言い換えると、その所有物が自己の存在の一部をなしている限りで、その所有対象に囚われている＝占められている。所有者が所有対象によって所有されるという事態が発生するのである。所有とは普通、あるものを自分の意のままにしうること（随意性）と考えられているが、所有とはむしろ自分の意のままにならないこと（不随意性）をこそ意味するのだ。すると、顔についても、顔を自分のものとして所有することで顔に所有されることになるという反転現象を確認できるのではないか。つまり、〈顔〉という現象を「わたしのもの」として所有しようとしたとたん、人は〈顔〉によって所有されることになるのではないか、と。

苦しむということは、ひとの持つものがそのひとの存在の構成分子になっているかぎりで、その持つものにおいて起こるのではなかろうか。肉体的な苦しみはあらゆる苦しみの原型、あるいはその根元である。（マルセル、前掲書）

同じ書物の中で、マルセルはこうも言う。

持つということは、自分が（それで）ないものである一つのあり方だ、と考えることはできないだろうか。明らかなことは、私にとっては、これら一見非常に抽象的なすべての反省の下に、私が自分の所有するもの（それは私自身ではなくて外的なものである）に密着しているという、ふしぎなほど直接な経験が横たわっていることである。

ここでは、所有は所有物への「密着」として、つまり自己を所有物と同一視することとして取り出されている。possession（所有）がpossession（憑依）へと、つまり所有されることへと反転してしまうということである。所有するということは、このように初めから自分を喪失する可能性を内に含んでいる。そういう喪失への不安が、ますます自己への密着（＝所属）への欲望を募らせる。

このように、人は何かを求めている限り、その求められるものに翻弄＝所有されてしまう。そこで人は、反転の起こらない「絶対的所有」をさらに求める。所有の「苦しみ」はこのような所有のもつれからくる。《絶対的所有の夢》。夢としての自己との一致である。我々は自分の顔であることを願うのだ。これは、強いられる、と言い換えても同じことだ。

わたしは顔を自分のものとして「領有」〔我がものとすること、自己固有のものと認めること〕させられる。顔はどうも、「持たない」こと、非所有のままであることを許さない現象であるらしい。